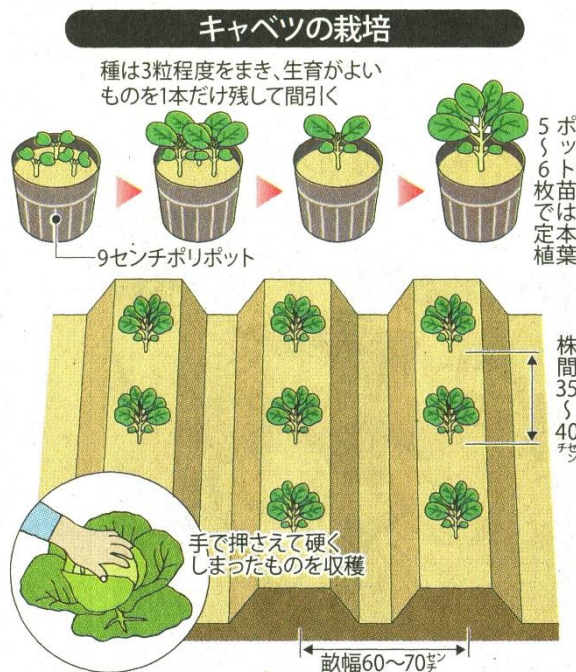


時期に合った品種を

—満留 克俊

生で食べても加熱調理してもおいしく、今では食卓に欠かせない野菜となっているキャベツの栽培について紹介します。

キャベツは栄養価が高く、ビタミンA・C、カルシウムのほか、胃腸を丈夫にするとされる通称キャベジンという成分を含んでいます。結球キャベツの日本への渡来は明治になってからで、最初は東北や北海道で栽培されていました。その後改良が進み、各地で栽培されるようになりました。



主に3～5月に収穫される**春系品種**は、葉が柔らかく巻きがゆるやかで、サラダや炒め物に多く使われます。12～3月に収穫される**冬系(寒玉系)品種**は、寒さで甘みが増し、葉がやや硬く煮くずれしにくいことから、ロールキャベツなど煮込み料理に適します。

生育適温は15～20度で冷涼な気候を好みます。花芽ができると、春先に結球せずに抽だい(花芽をもった茎が急速に伸長すること)を起こしたり、収穫前に裂球したりします。一定の大きさの株が低温に遭うと花芽分化(花芽がつくられること)し、その後の高温・長日で抽だい、開花しますが、花芽分化の条件は品種で大きく異なるため、栽培時期にあった品種選びがポイントです。

夏まき冬どり栽培は、育苗期に病虫害(苗立枯病、コナガ、ヨトウムシなど)対策をすると、定植後は栽培しやすくなります。**8月に種を**

まくと12～3月に収穫できます。秋まき春どり栽培は冬季に生育が進みすぎると、花芽分化を起こすことがあるため、花芽分化が遅い品種を選び、早まきしすぎないことが重要です。

10月に種をまくと、3～5月の収穫です。

キャベツの育苗は、本数が少ない場合、ポリポットに直接種をまいてもよく、9センチポリポットなら3粒程度をまき、生育がよいものを1本だけ残して間引きし、本葉が5～6枚頃に定植します。一度に多くを育苗する場合は、セル成型苗を利用してもよいでしょう。128穴トレイで、本葉2～3枚が定植適期です。

本ぼは、1平方メートル当たり堆肥を2キロ、苦土石灰100グラム、化学肥料60グラム(三要素15%の場合)を目安として全面に施します。畝幅は60～70センチ、株間は35～40センチで植え付けます。定植後1カ月後と2カ月後に、畝の長さ1メートル当たり12グラム(窒素・カリ16%の場合)程度追肥します。

よく結球し、上から手で押さえて硬くしまったものを収穫します。秋まき春どり栽培の場合、収穫期の生育が早いので、収穫遅れに注意しましょう。

(鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室主任研究員)